

令和5年度特別展
「The 名古屋市博物館」

4月29日(土)~6月11日(日)

重要文化財「豊臣家文書」翻刻

編集・発行 名古屋市博物館

○豊臣秀吉自筆金銀覚書付綴

桃山時代

六月廿六日

千六百七十まい しろかね

しろかねのおほへ

五月廿一日

一六千式百八十まい

六月十六日

一千まい

中こくしろかね正

七月二日

一式百まい

下ふき

同

一百廿まい

しゆのかね

○口宣案 平秀吉 従五位下

天正十年(一五八二)十月三日付

(端裏銘)「口 宣案」

上卿 甘露寺大納言

天正十年十月三日 宣旨

平秀吉

宣令叙従五位下

藏人頭左近衛権中将藤原慶親奉

○口宣案 平秀吉 左近衛権少将

天正十年(一五八二)十月三日付

(端裏銘)「口 宣案」

上卿 甘露寺大納言

天正十年十月三日 宣旨

従五位下平秀吉

宣令任左近衛権少将

藏人頭左近衛権中将藤原慶親奉

○口宣案 平秀吉 従四位下

天正十一年(一五八三)五月二十二日付

(端裏銘)「口 宣案」

上卿 甘露寺大納言

天正十一年五月廿二日 宣旨

従五位下平秀吉

宣令叙従四位下

藏人頭左近衛権中将藤原慶親奉

○口宣案 平秀吉 参議

天正十一年(一五八三)五月二十二日付

(端裏銘)「口 宣案」

上卿 甘露寺大納言

天正十一年五月廿二日 宣旨

左近衛権少将平秀吉

宣令任参議

藏人頭左近衛権中将藤原慶親奉

○口宣案 平秀吉 従三位

天正十二年(一五八四)十一月二十一日付

(端裏銘)「口 宣案」

上卿 甘露寺大納言

天正十二年十一月廿一日 宣旨

從四位下平秀吉朝臣

宣令叙從三位

藏人頭左近衛權中將藤原慶親奉

中務變理陰陽、夤亮天地、寔億兆之所仰、況萬國之所歸、宣申榮獎用光朝章、可依前件、主者施行

天正十三年三月十日

三品中務卿邦房親王
中務大輔闕

制書如右請奉
制附外施行、謹言

天正十三年三月十日

制可

月日辰時正四位行掃部頭兼大外記造酒正助教中原朝臣師廉
左中辨宣光

○口宣案 平秀吉 權大納言

天正十二年(一五八四)十一月二十一日付

(端裏銘)「口 宣案」

上卿 甘露寺大納言

天正十二年十一月廿一日 宣旨

參議平秀吉朝臣

宣令任權大納言

藏人頭左近衛權中將藤原慶親奉

正五位下行中務少輔臣藤原朝臣清種奉

行

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言臣

正二位行權大納言兼右近衛大將臣

正二位行權大納言臣

從二位行權大納言臣

從二位行權大納言臣

從二位行權大納言臣

征夷大將軍從三位守權大納言臣

權大納言從三位臣

正二位行權中納言臣

正二位行權中納言臣

正二位行權中納言臣

從二位行權中納言臣

從二位行權中納言臣

從二位行權中納言臣

正三位行權中納言臣

正三位行權中納言臣

正三位權中納言兼式部大輔臣盛長等 言

宣

關白左大臣正二位朝臣

太政大臣 闕

右大臣正二位行兼左近衛大將朝臣

内大臣從二位朝臣

式部卿 闕

正三位行權中納言兼式部太輔盛長

左大辨 闕

告從二位平秀吉 奉

制書如右、符到奉行

式部少輔 闕

大錄

少錄

少錄

天正十三年三月十日下午

○宣旨 藤原秀吉 關白

天正十三年(一五八五)七月十一日付

權大納言藤原朝臣

淳光 宣奉 勅万機

巨細宜令内大臣

關白者

○宣旨 平秀吉 内大臣

天正十三年(一五八五)三月十日付

平朝臣秀吉

權大納言藤原朝臣

經元宣奉 勅件人宜

令任内大臣者

天正十三年三月十日掃部頭兼大外記造酒正助教中原朝臣師廉奉

○位記 平秀吉 從二位

天正十三年(一五八五)三月十日付

從三位平秀吉

右可從二位

天正十三年七月十一日掃部頭兼大外記造酒正助教中原朝臣師廉

奉

正二位中納言臣

基孝

正二位行權中納言臣

重通

從二位行權中納言臣

光宣

○位記 藤原秀吉 從一位

從二位行權中納言臣

輝資

天正十三年(一五八五)七月十一日付

從二位藤原秀吉

從二位行權中納言臣

宗滿

右可從一位

中務鴻名蓋世、懿德濟衆、通天然之明、建

正三位行權中納言臣

兼勝

大聖之基、宜加英獎以穆朝章、可依前

制書如右請奉

件、主者施行

天正十三年七月十一日

○宣旨 藤原秀吉 上座

天正十三年七月十一日

三品中務卿邦房親王

月日辰時正四位行掃部頭兼大外記造酒正助教中原朝臣師廉

中務大輔 闕

左中辨宣光

正五位下行中務少輔臣藤原朝臣清種 奉

行

從一位行左大臣兼左近衛大將朝臣

正二位行權大納言臣

淳光

右大臣正二位朝臣

正二位行權大納言臣

公遠

式部卿 闕

正二位行權大納言兼右近衛大將臣

實益

正三位行權中納言式部大輔盛長

正二位行權大納言臣

晴豐

左大辨 闕

從二位行權大納言臣

公國

告從一位藤原秀吉、奉

從二位行權大納言臣

親綱

制書如右、符到奉行

從二位行權大納言臣

敦通

式部少輔 闕

從二位行權大納言臣

信房

大錄

征夷大將軍從三位守權大納言臣

義昭

小錄

權大納言從三位臣

信雄

小錄

正二位行權中納言臣

兼成

天正十三年七月十一日

○宣旨 藤原秀吉 兵仗牛車
天正十三年(一五八五)七月十一日付

○宣旨 藤原秀吉 内覽万機

天正十三年(一五八五)七月十一日付

左中將藤原朝臣慶親傳宣

權大納言藤原朝臣淳光宣奉

勅從一位藤原朝臣宜令内覽万機者

奉

天正十三年七月十一日修撰大寺大佛長壽殿頭兼大史小槻信朝等

天正十三年(一五八五)七月十一日付

權大納言藤原朝臣淳光 宣奉

勅関白宜令列前関白上者

天正十三年七月十一日掃部頭兼大外記造酒正助教中原朝臣師廉

奉

○宣旨 藤原秀吉 牛車宮中出入

天正十三年(一五八五)七月十一日付

權大納言藤原朝臣淳光

宣奉 勅関白為隨身

兵仗乘牛車宜出入

宮中者

天正十三年七月十一日掃部頭兼大外記造酒正助教中原朝臣師廉

奉

左中将藤原朝臣慶親傳宣

權大納言藤原朝臣淳光宣

奉 勅宜令内大臣從一位藤原朝臣

乘牛車宮中出入給者

天正十九年七月十一日修理實大史佛長官殿頭兼左史小槻信朝奉

天正十九年(一五九一)十二月四日付

從二位豐臣秀次

右可正二位

中務、開忠直路、平東藩之蛮夷、固清

聖場、征西鎮之寇賊、宜加采級用誇英

雄、可依前件、主者施行

天正十九年十二月四日

二品行中務卿邦房親王

中務大輔 闕

五位下行中務少輔臣藤原朝臣清種奉

從一位行權大納言兼左近衛大將臣 信房

正二位行權大納言兼右近衛大將臣 實益

正二位行權大納言臣 晴豐

正二位行權大納言臣 經賴

正二位行權大納言臣 親綱

正二位行權大納言臣 光宣

正二位行權大納言臣 輝資

正二位行權大納言臣 敦通

正二位行權大納言臣 家康

正二位行權中納言臣 兼成

正二位行中納言臣 基孝

正二位行權中納言臣 重通

正二位行權中納言臣 季秀

從二位行權中納言臣 兼勝

從二位行權中納言兼式部大輔臣 盛長

正三位行權中納言臣

正三位行權中納言臣

正三位行權中納言臣公仲等言

制書如右請奉

制附外施行、謹言

天正十九年十二月四日

制可

月日辰時正四位行掃部頭兼大外記造酒正助教中原朝臣師廉

關白太政大臣從一位朝臣

從一位行左大臣朝臣

從一位行右大臣朝臣

内大臣正二位朝臣

一品行式部卿智仁親王

從二位行式部大輔盛長

從三位行左大辨充房

告正二位豐臣秀次、奉

制書如右符到奉行

式部少輔 闕

大錄

少錄

少錄

天正十九年十二月四日

○後陽成天皇詔書 豐臣秀次 関白

天正十九年(一五九一)十二月二十八日付

○口宣案 豐臣秀次 權大納言

天正十九年(一五九一)十一月二十八日付

(裏端書) 「口 宣案」

上卿 中山大納言

天正十九年十一月廿八日 宣旨

權中納言豐臣朝臣

宜任權大納言

奉

藏人左少辨藤原光豐

○宣旨 豐臣秀次 内大臣

天正十九年(一五九一)十二月四日付

權大納言豐臣朝臣秀次

權中納言藤原朝臣兼勝

宣奉 勅件人宜

令任内大臣者

天正十九年十二月四日掃部頭兼造酒正大外記助教中原朝臣師廉

奉

○位記 豐臣秀次 正二位

詔、朕得瑤圖、希四海之淳朴、身在庸瑣
愧萬乘之至尊猶思羽翼之功、重假股

天正十九年十二月廿八日掃部頭兼造酒正大外記助教中原朝臣師廉奉

天正十九年十二月廿八日掃部頭兼造酒正大外記助教中原朝臣師廉奉

肱之力、內大臣豐臣朝臣、威名得譽、忠

○宣旨 豐臣秀次 豐氏長者

○宣旨 豐臣秀次 內覽万機

孝中規、益工聰利之才、早著輔佐之德、

天正十九年(一五九一)十二月二十八日付

天正十九年(一五九一)十二月二十八日付

夫万機巨細、百官摠已、皆先闕白、然後

右大辨藤原朝臣賴宣傳

右大辨藤原朝臣賴宣傳宣

奏下、一如舊典、庶耀博陸之徽號、宜致要

宣權大納言藤原朝臣光宣

權大納言藤原朝臣光宣奉 勅

道之政猷、普告遐邇、俾知朕意、主者施行、

宣奉 勅宜令闕白內大臣為氏長者

正二位豐臣朝臣宜令內覽万機者

(御画日)

天正十九年十二月「廿八」日

天正十九年十二月廿八日修理東大寺佛長官寺殿頭兼左史小槻信朝奉

天正十九年十二月廿八日修理東大寺佛長官寺殿頭兼左史小槻信朝奉

○後陽成天皇勅書 豐臣秀次 兵仗

天正十九年(一五九一)十二月二十八日付

○宣旨 豐臣秀次 闕白

○宣旨 豐臣秀次 牛車宮中出入

勅、法古行新、聖人之彝範、進賢治道、明主之

天正十九年(一五九一)十二月二十八日付

權大納言藤原朝臣光宣

大猷、爰內大臣豐臣朝臣、巖廊比才、邦國協

宣奉 勅万機巨細

宣奉 勅闕白宜乘

器、將備理政之佐忽授摠已之宣、仍賜左右

宣令闕白者

牛車兵仗出入宮中

近衛府生各一人・近衛各四人、以為隨身兵

天正十九年十二月廿八日掃部頭兼造酒正大外記助教中原朝臣師廉奉

者

仗、專施德音於帝闕之風、宜輝寵光於相府之

天正十九年十二月廿八日掃部頭兼造酒正大外記助教中原朝臣師廉奉

天正十九年十二月廿八日掃部頭兼造酒正大外記助教中原朝臣師廉奉

月、主者施行、

奉

天正十九年十二月廿八日

○口宣案 豐臣秀次 左大臣

○宣旨 豐臣秀次 氏長者

○宣旨 豐臣秀次 近衛隨身

天正十九年(一五九一)十二月二十九日付

天正十九年(一五九一)十二月二十八日付

(裏端銘)「口 宣案」

權大納言藤原朝臣光宣

權大納言藤原朝臣光宣

上卿 勸修寺大納言

宣奉 勅闕白內大臣

宣奉 勅闕白宜左右

闕白內大臣

宜為豐氏長者

近衛府生番長各一人

宜轉任左大臣闕白如旧

者

近衛各三人為隨身者

奉

藏人頭左中辨藤原宣泰

○口宣案 豊臣秀次 従一位

天正二十年(一五九一)五月十七日付

(裏端銘)「口 宣案」

上卿 中山大納言

天正廿年五月十七日 宣旨

正二位豊臣朝臣秀

宜叙従一位

奉

藏人左少辨藤原光豊

○豊臣秀吉朱印状 北政所宛

天正二十年三月二十三日付

知行方目録之事

一千石

定納

一千石

定納

一千石

定納

一千石

定納

一千石

定納

一千石

定納

一式百石

合壺万壺石七斗

右全可有領知候也、

天正廿年三月廿三日 (朱印)

北の政所殿

○豊臣秀吉朱印状 小出播磨守(秀政)宛

文祿四年(一五九五)正月十一日付

北政所殿知行目録之事

先高

一千石

先高

一千四百拾石

先高

一百八十四石五斗

先高

一四石八斗

先高

出来

一式千四百式拾六石壺斗四升

先高

一四千八十式石

出来

一式千三百三拾六石壺斗

先高

已上六千四百拾八石壺斗

先高

玉つくり

一千四百五石式斗四升

出来

一四百三拾壺石五斗五升

出来

一四百四十壺石式斗式升

出来

一式十石式斗九升

先高

一三百九十壺八斗壺

出来

一八十四石九斗四升

先高

一四百九拾九斗式

出来

一九十式三斗七升

先高

一四百拾八石式升

出来

一百拾七石七斗

先高

一三百五石五斗

出来

一百六拾五石七升

先高

已上四百七十石五斗七升

出来

喜連村

遊屋嶋

田嶋

中川

片江村

林寺

玉作

一八十六石九升

已上百三十四石九升

先高合九千九百拾貳石壹升

出米合五千七百六拾石貳斗五升

都合壹万五千六百七十貳石貳斗六升

右令執沙汰可運上候者也、

文祿四年正月十一日 (朱印)

小寺播磨守とのへ

○高台院自筆書状 木下ゑもんの大夫(延俊宛)

桃山時代 十二月二日付

さぬきにハ

十二日に

するくの

よし

数々

めてたく思ひ

まいらせ候、

そもし

まんそく

をし

ハかり

まいらせ候、

我々も

ひとしほ

めてたく

思ひ

まいらせ候、

かしく、

返々

やすくと

たん

しやう

めて

たさ

申

ハかり

なく候、

いそき

一ふて

申候、

めて

たく

かしく、

十二月廿三日

木下

ゑもんの大夫殿

まいる

高台院

○木下浄英黒印状 御きやくしん宛

慶長九年(一六〇四)閏八月二十二日付

つのくにかけのこほりのうちたかもくろくのおほへ
かうたいゐんさま御れうしよの事

一高四千七百五十五石九斗四升二合 ひらのしやう

一高千人百卅六石七斗八升六合 きれむら

一高四千八百四十七石三斗四升 てんわうじ

一高千石者 うりうのむら

一高八百石式斗 こくぶむら

一高五百八十三石式斗九升二合 ながかハむら

一高五百七拾四石六斗式升

此内貳百石ハかうさうすぶん

一高五百卅五石七斗九升

一高四百八拾石三斗七升

(黒印)

一高四百七拾石五斗六升七合

一高四百六拾石五斗壹升

惣合是壹万六千三百四拾八石四斗壹升九合

此内貳百石かうさうすぶんあり

木下二位法印

慶長九年後八月廿二日 浄英(黒印)

御きやくしん

御ひろう

○徳川家康書状 筑前中納言宛

(慶長五年(一六〇〇)九月二十四日付)

今度於関ヶ原

御忠節之儀、誠感

悦之至候、従最前之

節目無相違儀

別而祝着存候、向後

武蔵守同前ニ存、不

可有疎略候、委細者

井伊兵部少輔可申入候、

恐々謹言、

九月廿四日 家康(花押)

筑前中納言殿

○小早川秀秋自筆金子借用状 御きやくしん宛
慶長七年(一六〇二)九月七日付

借用仕金子之事

合五拾枚(黒印)者

右此秋八田伊与代官之内
にて慥返進可仕候、此由

御申上頼入候、以上、

慶長七年 岡山中納言(黒印)

卯月廿日

秀詮(花押)(黄印)

御客人

御披露

○徳川秀忠自筆書状 かうさうす・きやく人宛

桃山時代

暮の

祝義と

して

津多丹後守

を以申

まいらせ候、

此よし

よくく

あひ

ころへて申

さるへく候、

かしく、

(切封)

かうさうす

きやく人

ひて忠

○徳川秀忠黒印状 木下宮内少輔(利房)宛

(寛永元年(一六二四)十月二十一日付)

高台院遠行之

段、無是非事候、

誠痛間敷仕合候、

心底之程察思召

候也、

拾月廿一日(黒印)

木下宮内少輔とのへ

○対大明国和親交渉切紙(一)

(文禄二年(一五九五)六月)

太閤所示和親事件、當一一奏聞

朝廷、但二事尙有不允

太閤心必不甘、決然進兵、若

朝廷依舊例差官

冊封

太閤或阻之乎、或許之乎、請

太閤明示何如

○対大明国和親交渉切紙(五)

(文禄二年(一五九五)六月)

和親者兩件之中一條無許

諾者決難成、自

大明不可及

冊封、只兩件不允之返書、以使者

可言之、然則

太閤自將而到釜山浦、構城郭

其次到京畿築城雖歷兩三年

到遼東可進兵、自

大明亦出將帥可挑戰也、於渡使

介於此度、雖為何時捧今所

遣旌二本可透過陣營也

この翻刻は重要文化財「豊臣家文書」(名古屋市博物館蔵)のうち、特別展「The 名古屋市博物館」に出品資料のみのものです。予告なく改訂することがあります。